

花藻（既刊誌）

俳誌「花藻」の既刊誌から印象に残っている作品で。作者名は

正論

野仏は片手拝みで往く遍路

思い出をこぼさぬよ様に牡丹剪る

正論をいつも吐く妻春炬燵

長閑しやきつちりと折る紙人形

薫風

薫風ゆつくりまわる大風車

五月の天麒麟の首の長きこと

粽解く昔話を聞くように

栗の花少年恋を知り初むる

目標は次の新樹よ一輪車

麦秋や宙をひた蹴る赤ん坊

全天の星を華としビアガーデン

花冷え

風は自在に散るゆく花は人臭き

空の青踏んでシートの花見客

沖といい遠いといい春霞

子育て期古り地球儀に春埃

花冷えという美しき一語かな

明日よりも今日が大事と花は葉に

登り来て視野に展けし花・花・花

深海魚たらむ春暁の底をゆく

陽炎を歩いて女透きとおる

少年の志は一つ揚雲雀

春一番青い帽子を追いかける

競泳

紺の玻璃破り競泳始まりぬ

点滴の一滴一滴いのち惜し

土間の南瓜蹴飛ばす村のシンデレラ  
田園の彩甦る大夕立  
酔醒め襟かき合わす宿浴衣  
海月透く透けざる吾を前にして  
まだ微熱残る日昏れの百日紅  
鬼やんま目玉にうつす敵味方  
皺のなか声の若さの生身魂  
ふくよかな土偶の乳房夜の新涼  
露の野や隅の欠けたる石の斧  
薔薇崩れ怠惰の匂い残しおく  
白き腹晒して蝉の命果つ  
内視鏡半分通過汗固まる

万歩計

体内に悪魔棲ませて花を見る  
万歩計歩かされてる山の径  
燕きて一氣に空が青くなる  
天ぷらの油疲れてくる遅日  
うららかに二輛電車の欠伸かな  
ぬくもりが伝ふ絵手紙梅におう